

**京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書**

平成27年12月9日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 学際融合教育研究推進センター(アジア研究教育ユニット)

職 名・学 年 研 究 員

氏 名 入 江 恵 子

助 成 の 種 類	平成27年度・若手研究者在外研究支援・国際研究集会発表助成		
研 究 集 会 名	全米女性学会2015年第36回大会 NWSA 36th Annual Conference		
発 表 題 目	疾患名称の変更と医療化: インターセックスと性分化疾患の事例から Medicalization and Nomenclature: Intersex and Disorders of Sex Development		
開 催 場 所	アメリカ・ウィスコンシン州・ミルウォーキー・Hilton City Center、Wisconsin Center		
渡 航 期 間	平成27年11月12日 ～ 平成27年11月18日		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	300,000円	
	使用した助成金額	282,746円	
	返納すべき助成金額	17,254円	
	助成金の使途内訳	NWSA2015大会参加費	23,316円
		大会参加外国旅費	259,430円
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 研究が進むにつれてネットワークも広がり、海外の研究者や、調査対象者らから学会や集会上に声をかけていただくことが増えた。雪だるま式にネットワークを広げているため、少しの機会も逃したくないが、海外で行われる学会や集会上に参加するには研究費が必要である。様々な助成金も活用しているものの、すべてをまかなえるわけではない。このたびの振興財団の助成金はこのような意味において大変ありがたかった。今後も、海外をフィールドとする若手研究者に機会を開いておいてほしい。		

成 果 の 概 要

京都大学学際融合教育研究推進センター

研究員（特別教育研究）

入江恵子

学会概要

大会名：全米女性学会 2015 年第 36 回大会

NWSA (National Women's Studies Association) 36th Annual Conference

発表題目：「疾患名称の変更と医療化：インターセックスと性分化疾患の事例から」

“Medicalization and Nomenclature: Intersex and Disorders of Sex Development.”

開催場所：ウィスコンシンセンター、ヒルトンミルウォーキーシティセンター

(アメリカ合衆国・ウィスコンシン州・ミルウォーキー)

派遣期間：2015 年 11 月 13 日～18 日

研究集会について

本研究集会は、1977 年に設立された、北米における最大規模の女性学に関する集会の第 36 回大会である。学際的かつ社会運動的要素も含む学問である女性学を通じ、世界における女性の地位向上をはかる集会である。学会員はアメリカ国内にとどまらず、世界中に 2000 名を超える。参加者は、学者や研究者のみならず、教育、社会運動家、芸術家など、多岐にわたる。報告内容についても、学術的な研究報告に加え、政治に携わる参加者による具体的な社会政策を議論する部会や、女性リーダーの育成方法に関する部会、女性問題を知覚させるための体験型のワークショップまで様々である。また、女性学の推進を目的とした、就職あっせんのためのコーナーも設けられていた。

2015 年の第 36 回大会は、“Precarity”をテーマとし、女性が置かれている不安定な社会状況や、女性身体がもつ社会的脆弱性の問題を扱う報告やセッションが多数見られた。英国の研究者 Sara Ahmed 氏をゲストに迎え、“Feminism and Fragility”として女性身体をとりまく「壁」について講演会が開かれた。Ahmed は現在人気のある研究者であることもあり、会場は大変な熱気であった。Ahmed 氏とは、講演後に意見を交換することもでき、発表の内容と先日出版された著書について質問、議論することができた。

発表内容と成果

11 月 15 日の部会「Pathologizing Technologies」において上記タイトルについて口頭発表を行った。司会はサイモンフレイザー大学の Nadine Boulay 氏で、午前 8 時から午前 9 時 15 分までの 1 時間 15 分であった。具体的な発表内容は以下のとおりである。

身体の性の状態が、解剖学的な「男／女」の状態から外れることを指す専門用語は、この 50 年の間に何度も変更されてきた。現在もっとも一般的に認知されているのは「インターセックス」であるが、2005 年のシカゴコンセンサスとして同意を見たのは、「性分化疾患 Disorders of Sex Development」への変更である。「インターセックス」とは、具体的な身体

状況を示す言葉ではない代わりに、社会によって「男でもない、女でもない」とラベリングされた共通状況を、自らのアイデンティティに変換する、いわば社会政治的要素を帯びた名称である。片や、「性分化疾患」とは、男・女のカテゴリーから外れる身体を病理化する用語である。日本における当事者のあいだでは、性分化疾患が好まれるのに対し、アメリカでは、一般的な口語表現を主として、学会における論文のタイトルなどでもインターセックスが好まれる傾向にある。こうした相異について、両国間の運動の歴史と当事者の語りを分析し、その原因と背景を明らかにした。

同部会では、同じく身体をテーマとした発表が報告者以外にも3つあり、活発な議論へと発展した。特に、遺伝子と性の扱いについて発表したルトガーズ大学の **Alessa Valentin** 氏とは、性分化疾患（インターセックス）についての関心も共通しており、部会終了後も意見交換をすることができた。また、同部会の **Kj. J. Surkan** 氏とも最新のジェンダー研究について情報交換をすることができた。また、**Surkan** 氏が所属する MIT 大学のジェンダーと科学 (**gender and science**) 研究のグループに加えていただくことができた。現在はまだ情報を一方的に閲覧している状況だが、将来的に共同研究に発展させることを視野に入れて意見交換を行っている。

同学会に参加していた、同じくインターセックス（性分化疾患）研究者の南フロリダ大学の **David Rubin** 氏とも再会することができた。インターセックス当事者らの専門用語に関する態度の日米比較をテーマに、来年度からの具体的な国際共同研究について、期間やフェンドなどの予定について打ち合わせ中である。

謝辞

最後になりましたが、助成に採択いただいたおかげで上記のような有意義な成果につなげることができました。公益財団法人京都大学教育研究振興財団に心より深く感謝いたします。